

◆八木健 選

～峰崎成規『遊戯の遠景』（角川書店）を読む ④～

句集というものは有難い。作者が二十年、三十年かけて積み重ねた心の記録を短時間に共感させて貰えるわけで、どの句にも一遍の随筆や短編小説と同じ深みがあるからだ。峰崎成規句集の鑑賞は、今回で仕上げとさせていただきます。

第五章「等身大」（二〇二二）

新涼や等身大は生きやすし

生き方に正解はない。上手く生きられたと威張ってみたり、大した才能もないのに背伸びしてみたり、失敗を重ねて自己卑下することもあるだろう。さまざまな局面で体験してきたことが後に冷静になった時に恥ずかしいこともある。この句には、そんないろいろの体験を経ての達観がある。何事も無理をせず、等身大を基本にすれば生きやすいのだという人生観とでもいうべき教訓である。ただし、読者にそれを押し付けるのではなく、自身の観想として留めおいた作品と思われる。

束ねたる書は知の地層春惜しむ

作者の思いがけない新鮮な見立てに、読者は驚かされる。書を束ねたのが知の地層に見えたというから楽しい。頭が柔らかい人ほど面白い言葉を創造する。地層までは思い付くかもしれないが、「知の地層」となると、うーんなるほどと感心させられる。

風無くば家族寄り添ふ鯉幟

鯉幟の句は、風がある時の一家族が楽しそうに泳いでいるところを詠んだものが多い。しかし、それは凡人の発想である。この句は、無風の鯉幟を詠んで斬新である。実際には力なくだらりと垂れ下がっているのだが、家族が寄り添っているとした。なるほど、そんな視点はなかなか持てない。作者は鯉幟にな

りきっていたから鯉幟の気分が読めたのだ。家族の声が聞こえたに違いない。なんだか退屈だなあと鯉の子どもがつぶやく。いやいやこんな時こそ休息をとって次に備えるのだよと父親の鯉。目も口も閉じて休みましょうと母鯉。「寄り添う」にはそんな会話が描かれている。擬人化に温もりを感じる。

子子の明日飛ぶためのストレッチ

子子は「ぼうふら」と読む。子子の水中での屈伸運動を「ストレッチ」と見た。子子は明日のことなど全く考えていないだろうが、「明日飛ぶため」と決めつけているところに作者の思い込みがあり、それがいい。

墓越しに齢訊ぬる秋彼岸

墓参りでの出来事である。墓の向こう側にいるのは、昔からよく知る懐かしい人だった。御幾つになられましたか。何年もお会いしてなかったから思わず訊ねたのだ。へえそんなお齢になられましたか。いやお若いですよ。今度ここでお会いできるのは何時のことか分かりませんが、どうぞお元気で。

台本の要らぬ余生や日向ぼこ

たしかに台本のある生活だとしたら、自由を剥奪された余生と言わねばなるまい。余生も日向ぼこも自由でなくては楽しくない。自由とは気ままということであるが、逆に言えば、これまでは台本を生きねばならない日々があったということである。作者の解放感と安堵感が伝わってくる。

第六章「野火走る」(二〇二三)

歳月を奪ひ去らむと野火走る

野火は春の季語で、枯草を焼くことにより害虫も駆除しようという目的のある農林業の作業の一つ。ただ残念なことに、今春は全国で大きな山火が発生した。この句は、まさに野火の暴力を描いている。奪い去られようとしているのは歳月。自然が培った原野の風景も人為的に作られた大切な事物もあつとい

う間に燃え尽くしてしまう。目に見えるものだけでなく、時間をも燃やして無の世界へと変えてしまうのである。

麦秋をたつぷり走る赤字線

4

過疎となりつつある地域を走るローカル列車は赤字路線が多い。麦秋の風景の真ん中をトコトコと申し訳なさそうに走っている。急ぐこともない。せっかくの麦秋の風景を愉しめばいいではないか。「たつぷり」は麦秋にもローカル列車の走り方にもかかっている。列車を応援する気持ちも伝わる。

無為といふ時の贅沢新樹光

作者はよほど忙しい生活を送っているに違いない。だから無為という無目的な時間が何にも代えがたい贅沢な時間なのだ。そしてそれを実感できるのが新樹光なのだ。新樹の若緑をたつぷり吸った光から生命のエネルギーをいただくのである。

峰崎成規：昭和二十三年、千葉県生まれ。平成二十四年「沖」入会。令和四年「沖」同人会幹事長。千葉県俳句作家協会新人賞、手児奈文学賞ほか多数受賞。